

## 第 2 回次期水源地地域交流の里づくり計画検討委員会での主な意見

## 1 水源環境の理解促進について

- 水源地は非常に重要なので、県民の財産としてこの地域を位置づけることが非常に重要である。水源地がダメになったら県全体の水不足とか、県土保全とか多様なものに影響する。（県民）みんなのものであり、みんなで守っていかなければいけないという視点をどこかに入れる必要がある。

## 2 水需給の状況について

- 現計画の 6 ページに記載されている水需給の状況を示す円グラフは自分たちの住んでいる地域がどこから来た水かを見えるように工夫して欲しい。もう少し戦略的にグラフを使ってはどうか。

## 3 里の案内人について

- 里の案内人の役割や位置づけ、地域との関わりなどを明確にしなければならない。
- 里の案内人のイメージを共有できていないことが問題。
- 里の案内人のつながりがないので、ネットワークや連絡調整の場、情報交換の場が必要。集まって議論した方がよい。
- 現在の計画に記載されている役割を全てやるのは無理がある。コーディネーターとして観光協会だったり、NPO 法人だったり、そういったところと連結させなければ動かない。
- 里の案内人のネットワーク作りについては、今後どのようにやっていくのか、その仕組みづくりが一番重要になると思う。

## 4 着地型・体験型水源地ツーリズムについて

- 「里の暮らしを見る」というのも楽しいツーリズムである。
- 国交省がインフラツーリズムに力を入れている。立派なダムなど、日本の土木技術によってできたものが観光資源になる。ダムの歴史や、ダム工事の技術などもツーリズムの対象にしたらどうか。
- 水道道ツアーというか、どういう道筋で水道が都市地域に届いているかを知るツアーというのも、自分たちの水がどこから来ていると実感できるので面白いかもしれない。
- 単なる水源地ツーリズムというと採算の取れるツーリズムは難しい。公民館事業として、水源や里山といったところに来るツアーの申し込みが結構ある。そういうものをつなげて提携して若干でも費用負担してもらえよう工夫が必要かと思う。
- 外国人を受け入れる動きが既に始まっている。外国人も水源地や自然の豊かなところへのツーリズムに乗ってくるので、そういった視点も必要。
- 日本の新しい方向性として外国からの観光誘致がある。「暮らしのツー

リズム」というのか、そういったところに外国人が入りだしたことは間違いない。パンフレットの外国語化ができれば、必ずずっと入り込んでくる。外国人向けの施策の検討を進める必要があると思うので、明文化していつてはどうか。

- お隣さんの町が何をやっているのかという情報が入ってこない。水源地ツーリズムの中に、横のつながりを持つという意味合いを含めてはどうか。

## 5 交流拠点について

- 交流施設を誰でも使えるように、交流拠点の一覧表みたいなものを作ってはどうか。もう少し広く誰でも使えるような仕組みを考える必要がある。

## 6 やまなみグッズについて

- やまなみグッズについて、ここにしかない、そんなストーリーをつけることで良くなるのではないかと思う。
- やまなみグッズの認定基準が厳しいと思う。やまなみグッズを増やしていくためには、認定基準を緩和するというのも一つの考えではないか。